

水泳運動の授業づくり
—系統性,順序性を考える—

合屋 十四秋

系統性と順序性を問う

- 「水泳観や水泳指導の目的の違いを理論的に整理」する必要あり(佐野 1977)
- 果たして学習指導要領はこれを踏襲しているか?
- 生活の中の水泳水中運動と実用性は?
Cf.生活の中の体育(H10 学習指導要領)

水泳指導の目的と方法が決まる

⇒どのような技術単位を

⇒どのような順序で教えるのか?(佐野,1977)

Cf. FSSにてクロール⇒背泳ぎ(ある子供の対処)

後述:FSSのカリキュラムの変遷

⇒泳げる=溺れない?(Moran,K 2009)

⇒足の着かない所での対処⇒水泳の目的は?

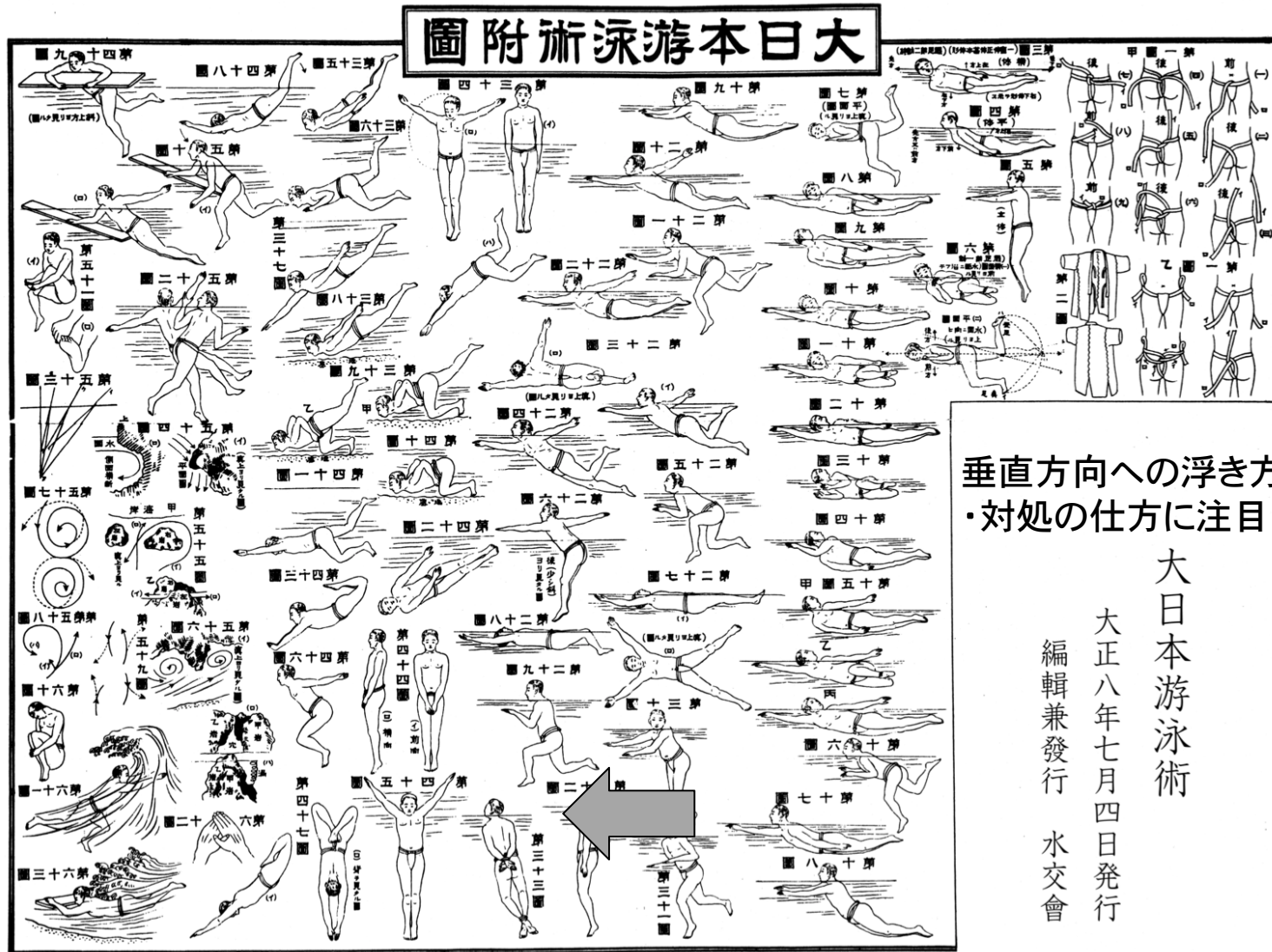
⇒泳法指導とWater Safetyの違いと目的

(フレッド・ラヌー 1969,梅田 1973,木庭 1976)

⇒溺れる原因究明⇒系統性,順序性決定

(Stallman et al. 2008)

游泳術 (泳法カリキュラム 1919年)



学校体育はスポーツの導入部分

- サッカー日本代表フィジカルコーチ
エウジェニオ・アルバレッラ氏談

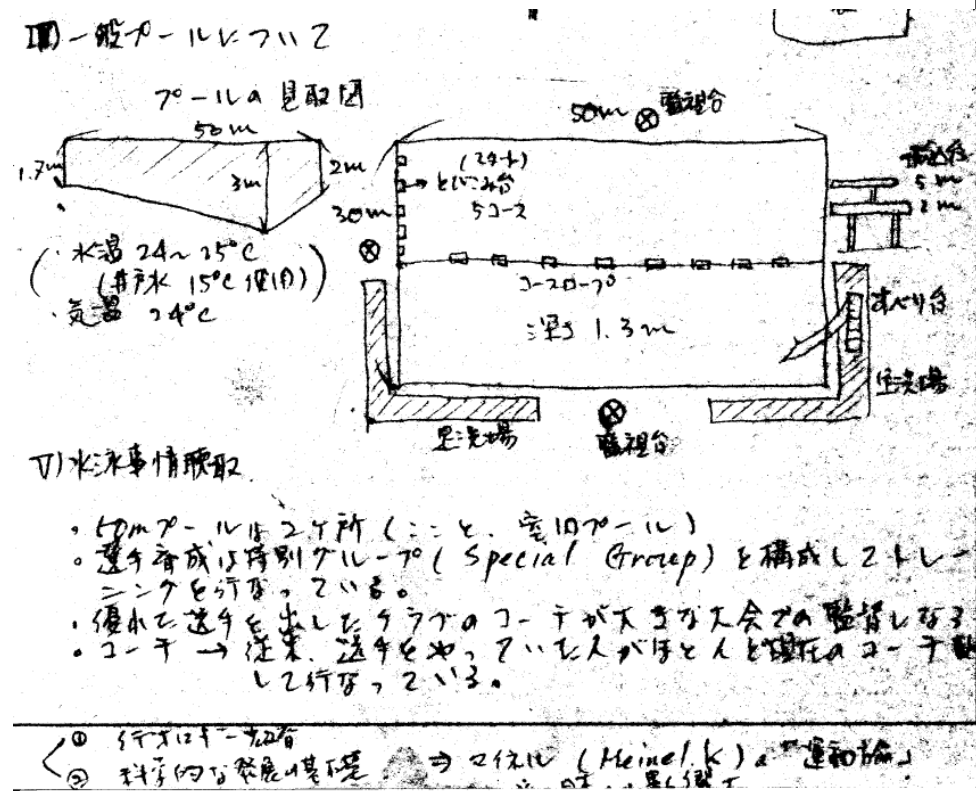
ヨーロッパにはない日本の学校体育の役割のひとは「スポーツ競技への導入部分」として非常にうまく機能している。

動機づけと基礎基本に触れる

では、Europeのその背景と展開方法は？

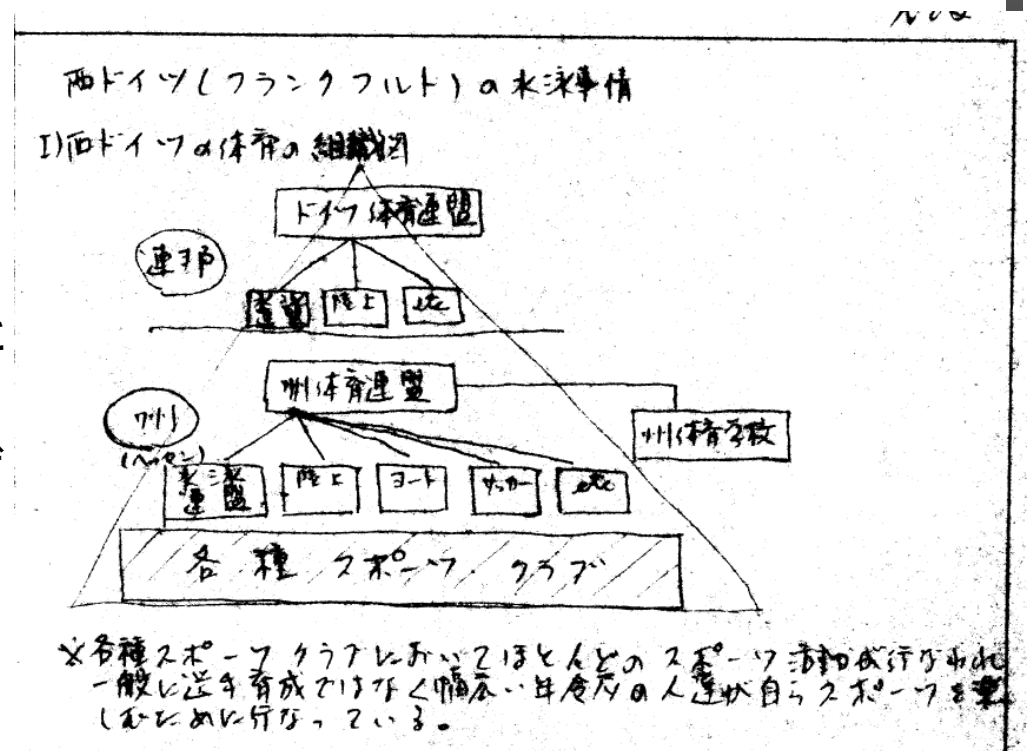
東ドイツ(ライプツィヒ)の水泳事情 1974年

- 市内9カ所に室内人民プール
- (全て1.8m×25m×12.5m)
- 学校のプールなし
- 水泳指導:
学校の先生+マスタートレーナー
- 7時~15時: 学校の水泳授業
- 初心者指導: 深い所から: 溺れない
- 15時以降: 一般有料開放: 120円
- 競技用屋内50mプール1カ所
- DSB (Deutsche Sport Bundes)
- 49種目の競技団体を統轄
- 1950年ライプツィヒ体育大学創設
- 科学的基礎: Meinel, Kの運動学



西ドイツ(フランクフルト)の水泳事情 1974年

- Offenbach Schwimm Club
- 1950年創立:川で泳げなくなる
- 会員7000名,各種スポーツ部門
- 水泳,水球が主流
- 会費:大人1200円,家族1800円/月(他よりも高い)
- 初心者指導:深い所で溺れないこと
- 学校とスポーツクラブ
 体育の授業 2hrs/week,開放せず
 ほとんどがスポーツクラブ入会
 目的:健康第一&Human Relation
- 1)Sport Clubと 2)Sport Ugent
- 1)は生活の一部・社交の場
- 2)は学業・競技成績優秀者を組織化
 右図参照(DSB:一般と競技を区分け)



共通する水泳指導システム・内容

- 政治体制が違っても,,,,,
- 学校ではなくクラブ組織などで教える
(cf. Jリーグ:後述)
- 初心者指導;
- 足のつかない深い所で泳ぎを教える
(溺れないこと:生活の中の一部)
優先すべきこととその方法が明確
(cf.オランダ,オーストラリア,NZ,英国など)

学校体育と地域スポーツクラブ

- 課外スポーツを含め 学校体育を中心とした日本の教育 クラブ活動育成システムと異なり ほとんどの地域のスポーツクラブが受け皿となり 一般から競技レベルまでのスポーツ活動をカバーするシステムが完全に定着
- 日本のサッカー界が Jリーグを中心とした地域密着型スポーツクラブとして形を整えたのが40年後の現在,であることを思うとヨーロッパのスポーツの歴史の深さを思い知らされる気がする

競技の指導と学校での指導の区別

- 1) 子供にとって泳げることは必ずしも溺れないことにはつながらない
- 2) 子供は、垂直方向への対応ができていない
→ 指導・教育の必要性あり
- 3) 水泳=生命と深く関わりを持つ
(Kevin Moran, 2009)

↓

「三十六・三」
この記録は小学校最後の記録会で出したタイムだ。さつとずつとずつと心臓のこもる僕のタイムだと思ふ。今まで速く泳げるようになれたのは、この学校のプールがあったからであり、速く泳ぐことだけではないということを知ったのも、この学校のプールがあったからだ。自己ベストよりおそいけれども、ぼくはこのタイムは一つの不満ももっていない。それは、僕にとってとても楽しかった学校のプールで出した大切なタイムだからだ。

↓

「最後に残した三十六・三」
北島 康介
ぼくは水泳をならっている。速くなろうとしている。そして、大きな大きな夢をもって。それは速くなつて、国際大会でメダルを取り、日本の代表選手に選ばれて、オリンピックに出ることだ。その夢にむかって一歩一歩近づいていきたいと、ぼくは毎日プールに行つて泳ぎ続けている。

でも学校のプールは少し違う。学校のプールは速く泳ぐことだけではない。そして速くなることでもない。自分の身を守るためであるということ。ぼくは頭にたたきこんでいる。もちろん速くなり自分のベストをつくしていい結果が生まれれば、それはいいと思ふ。もしそうでなかったら、水泳とはとても不思議なスポーツである。ぼくはこの六年間でこのようなことを勉強したのだ。

08.8.12 産経新聞より

最近の水泳の学習指導要領の変遷

	1,2学年	3,4学年	5,6学年
1989年	基本の運動:水遊び	水泳: <u>クロール, 平泳ぎ</u> , (スタート) 続けて長く	水泳: <u>クロール, 平泳ぎ</u> , (スタート) 続けて長く
1998年	基本の運動:水遊び	基本の運動:浮く, 泳ぐ 水泳: <u>クロール, 平泳ぎ</u> (4学年) 続けて泳ぐ	水泳: <u>クロール, 平泳ぎ</u> (背泳ぎ) 続けて長く
2011年 授業時数 10% Up	基本の運動:水遊び 水に浸る, 移動, 潜る, 浮く, 息を吐く 遊び方の工夫, 安全	浮く・泳ぐ運動 様々な浮き方, けのび 補助具 初歩的な泳ぎ(呼吸あり) 自分に適した課題と工夫	水泳: <u>クロール, 平泳ぎ</u> (背泳ぎ) 水中からのスタート 続けて長く 記録への挑戦

* 伝承遊び, 自然での遊び

2014/06/06

指導要領は依然として水平方向思考？

- クロールと平泳ぎ(なぜこの種目から?)
(泳ぎ方はこれだけか?橋渡しの泳ぎ方は?)
- 初心者:様々な浮き方⇒「けのび」だけ?
(垂直方向は?水中安全・自己保全の方法は必須では?)
⇒1953年版,小学校,(D)ふみ足泳法(立ち泳ぎ)あり
- 初歩的な泳ぎ⇒CrとBrに繋げる意図・手段は?
(初歩的な泳ぎの中身は?呼吸を伴った中間的な泳ぎ方の
例示が必要では?前後の文脈は繋がるのか?)

エレメンタリーバックストローク (カエル足キックフルストローク)



ハンガリーでよく見かけた

呼吸あり振動の連続写真

(高橋ら 2007)



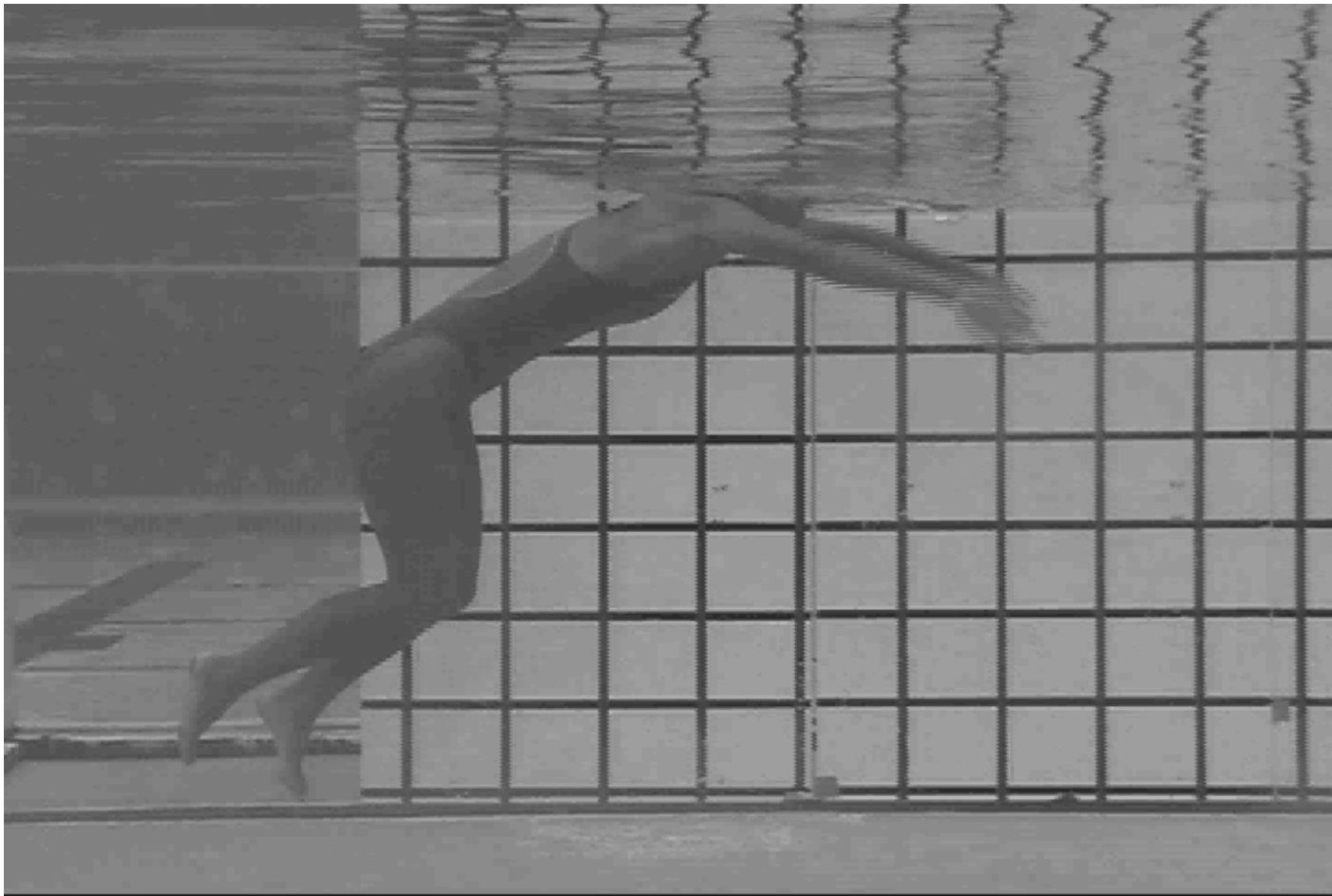
重力や浮力や慣性等の自然力の利用は年齢に関係なく
追求できる新に魅力的なチャレンジである.

息を一杯吸って浮いてくるまで待つ



応用：ラヌー式浮標からドル平へ？

重力や浮力や慣性等の自然力の利用. 例2



カリキュラムの行き詰まり

- バタ足から始まり25mクロール完泳に至る段階
- 面かぶりCrは15m付近が限界
- 息継ぎが容易な背泳ぎから25mCr泳へ

⇒呼吸動作の獲得に要する時間の短縮

- 技術要素の連続性,関連性をCr⇒Buに組み入れ
- カエル足&手足の協応動作が最難関

面かぶりCr⇒25mBa⇒25mCr⇒25mBu⇒25mBr

⇒では,プリント資料(FSSカリキュラム)の説明へ

残された問題点

1. 学校体育と地域スポーツの関わり
(小,中,高の水泳授業とSCの相互補完?)
2. 教育現場の実際と展開
指導要領の内容と実践現場のギャップ?
3. 問題の所在と解決に向けての方策は?
実態調査・研究・提言・提携or棲み分け?